

千駄堀寒風遺跡

—千葉県立松戸高等学校格技場新築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—

平成15年12月

千葉県教育委員会

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第461集として、千葉県立松戸高等学校格技場新築工事に伴って実施した千駄堀寒風遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代の炉穴や陥穴が発見され、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また文化財の保護普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際しご指導、ご協力をいただきました地元の方々を始めとする関係者の皆様や関係機関、また発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成15年12月1日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 清水 新次

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の経緯・経過	1
第2節 遺跡の位置と歴史的環境	1
第3節 調査の方法	3
第2章 検出した遺構と遺物	4
第1節 遺構	4
第2節 遺物	5
第3章 まとめ	6
報告書抄録	卷末

挿図・図版目次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡	2	第6図 1号炉穴・2号陷穴・3号陷穴	4
第2図 遺跡周辺地形図	2	第7図 繩文土器拓影図	5
第3図 遺構配置図	3	図版1 調査風景、土層	
第4図 発掘地点	3	1号炉穴、2号陷穴、3号陷穴	
第5図 基本層序	4		

凡　例

- 1 本書は、千葉県教育委員会による千葉県立松戸高等学校格技場新築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県松戸市中和倉590-1に所在する千駄堀寒風遺跡(遺跡コード207-018)である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県教育委員会の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、西部調査事務所長 田坂 浩の指導のもと、上席研究員 立石圭一 が下記の期間に実施した。
 - 発掘調査 平成15年5月1日～平成15年5月16日
 - 整理作業 平成15年5月19日～平成15年5月30日
- 5 本書の執筆は、上席研究員 立石圭一が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県教育委員会、松戸市教育委員会の御指導、御助言を得た。
- 7 本書に使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「松戸」
 - 第2図 陸地測量部作成 1/20,000迅速図 明治17年(原図を1/25,000に縮小して使用)
 - 第4図 松戸市発行 1/2,500都市計画図
- 8 本書で使用した図面の方針は、すべて座標北である。また、測量は日本測地系による。

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯・経過

千葉県立松戸高等学校の男女共学化の開始による格技場建設に伴い、事業区域内に所在する埋蔵文化財の有無と取り扱いについて、千葉県教育委員会に照会した結果、当該調査地内に埋蔵文化財が所在することが判明した。取り扱いについては、学校移転時に校地内で埋蔵文化財調査が実施された経緯があり、周辺に周知の埋蔵物包蔵地が所在していることから、協議の結果、記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが調査を担当することとなった。発掘調査は、平成15年5月1日から平成15年5月16日まで実施し、引き続き整理作業を行って報告書刊行の運びとなった。

第2節 遺跡の位置と歴史的環境（第1、2図）

千駄堀寒風遺跡は下締台地の西端、江戸川の沖積低地を臨む標高27~28mの台地上にある。この付近一帯は江戸川に流入する支流によって開析された小支谷が複雑に入り組み、舌状台地の形状を成している。南北を小支谷によって区切られ、北西方向に伸びている舌状台地上の、やや南よりに遺跡は立地している。当該遺跡も含めてこの周辺の台地上では早くから遺跡の存在が知られ、研究者や大学などによる発掘調査も行われてきた。現在は開発が進み、消滅した遺跡もあるが、以下に記すのが周辺の主な遺跡である。

寒風の台地北西部に中和倉寒風遺跡があり、昭和37年に発掘調査が実施された。その際、縄文時代後期及び弥生時代後期の土器と弥生時代竪穴住居跡が検出され、該期の集落の存在が確認されている¹⁾。小支谷を挟んで西側の台地先端部に上本郷七畝割遺跡、南東側に寒風台遺跡が所在する。上本郷七畝割遺跡は昭和37年に発掘調査が行われ、縄文時代早期・後期及び弥生時代後期の遺物が出土し、縄文時代及び弥生時代の竪穴住居跡が検出された²⁾。寒風台遺跡は昭和56年に発掘調査が行われ、縄文時代早期の炉穴及び前期の竪穴住居跡が検出された³⁾。

千駄堀寒風遺跡の南西約12kmに所在する上本郷遺跡は、大正10年に山内清男氏らによって発見され、大里雄吉氏により貝塚の存在が公表されている⁴⁾。『人類学雑誌』に掲載された山内氏の報文によれば、大正11年に組織的に発掘調査をしたということで、これが当遺跡の最初の調査である。以降、平成13年まで十数次にわたる調査が行われた。10か所以上の貝塚、縄文時代前・中・後期の遺構・遺物が検出されており、研究史上重要な位置を占めている。

千駄堀寒風遺跡は、昭和8年に平野元三郎氏らによって最初の発掘調査が実施された⁵⁾。その後、昭和38年に和洋女子大学による調査が行われ、縄文時代中期の人骨を含む遺構・遺物が検出された⁶⁾。県立松戸高等学校の移転に伴い、昭和39・40年に校地予定地内とその周辺での調査が松戸高等学校社会クラブによって実施された。校地予定地内では遺構は検出されず、土器の破片が見つかっただけであるが、周辺地域では縄文時代中期の人骨を含む多くの遺構・遺物が検出された¹⁰⁾¹¹⁾。平成13・14年度に行われた調査では、旧石器時代石器、縄文時代中期の遺構・遺物が検出された¹²⁾¹³⁾。当該遺跡周辺は早くから大規模開発の手があり、遺跡も大方が消滅したものと考えられていたが、まだ遺存している部分があることが判明したことは大きな意義があると思われる。



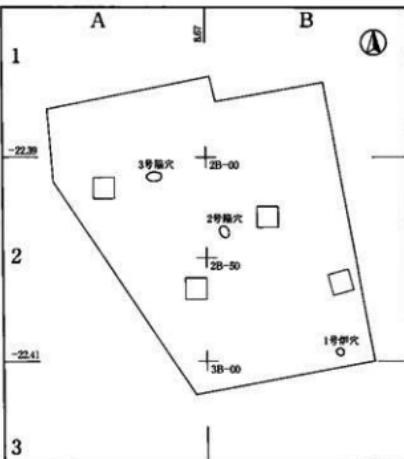
第1図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1/25,000 松戸)



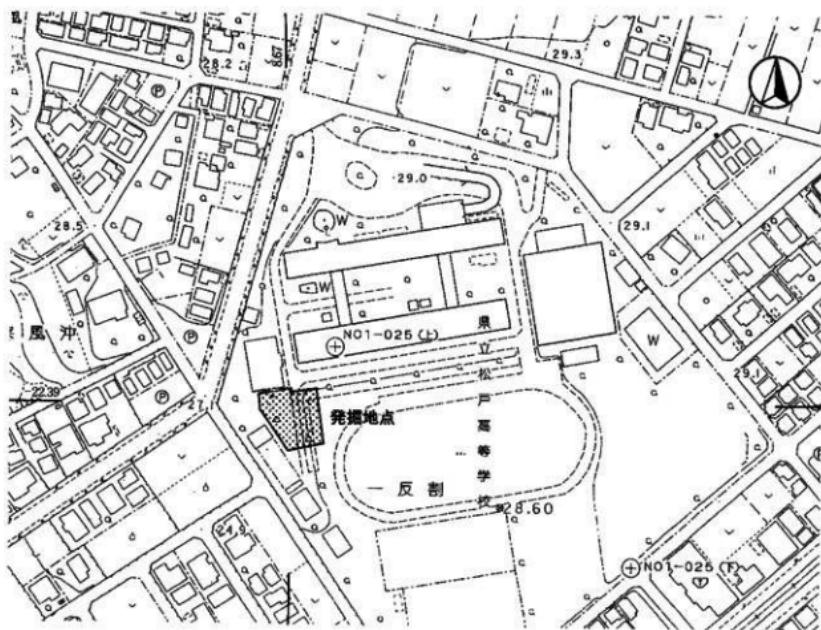
第2図 遺跡周辺地形図 (1/25,000)

第3節 調査の方法

調査の開始にあたって、調査対象範囲を覆うように公共座標を基準としたグリッドの設定を行った。20m×20mの方眼を大グリッドとし、この中を2m×2mの小グリッドに100分割した。大グリッドは北西隅を基準とし、北から南に1・2・3、西から東にA・Bの名称をつけ、小グリッドも北西隅を基準に南に向かって順に00・10・20…の番号をふり、両者を組み合わせて1A-00というよう呼称した。調査対象面積が490m²と狭いため、上層については表土を全面除去し遺構の有無を確認した。その結果、炉穴1基、陥穴2基を検出し本調査を実施した。下層については2m×2mの確認グリッドを4ヶ所設定し、石器等の有無を調査したが、遺物の出土が認められなかったので確認調査で終了した。



第3図 遺構配置図 (1/500)



第4図 発掘地点 (1/2,500)

第2章 検出した遺構と遺物

第1節 遺構

調査地表土層の上部は茶褐色土層でしまりが弱く、下部は暗褐色土層でしまっていった。これらは昭和39年から40年にかけての県立松戸高等学校移転に伴う建設工事の際の盛土と考えられる。遺構検出面では、ソフトロームとハードロームが混在しており、校舎建設工事の際にⅢ層上面が削平された可能性があるが、Ⅳ層以下の立川ローム層はしっかりと残っていた。調査の結果、検出された遺構は炉穴1基、陥穴2基である。いずれも縄文時代のものである。

1号炉穴

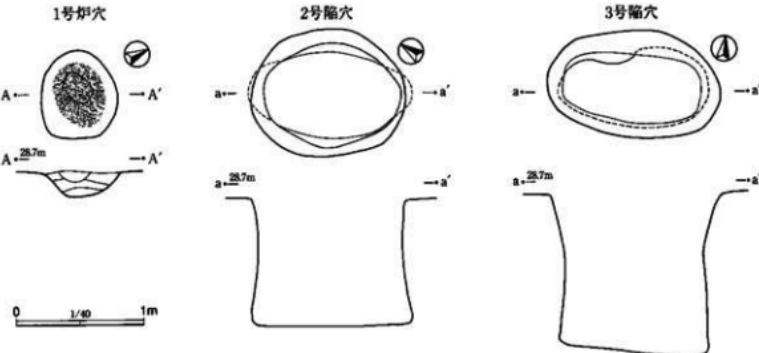
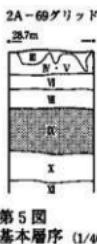
調査地の南側より検出した。平面形は円形に近く、長軸は約0.7m、短軸は約0.6m。確認面からの深さは0.2mを測る。長軸の方位はほぼ東西方向である。焼土の堆積はなく覆土を除くと床面から壁面の上部にかけて被熱面が露出した。覆土は自然堆積である。一部擾乱により形状が崩れている。遺物の出土はない。

2号陥穴

調査地中央部より検出した。平面形は梢円形で、長軸は約1.3m、短軸は約1m、深さは確認面から約1mを測る。床面は平坦であるが、長軸方向では床面が上端より外側に掘り込んである。長軸の方位はN-32°-Wである。覆土は自然堆積である。

3号陥穴

3号陥穴は調査地の北側より検出した。平面形は梢円形で、長軸は約1.4m、短軸は約0.9m、深さは確認面から約1.3mを測る。床面は平坦であるが、西側から東側にかけてわずかに傾斜している。また、一部床面が上端よりも外側に掘り込んである。長軸の方位はほぼ東西方向である。遺物の出土はない。



第6図 1号炉穴・2号陥穴・3号陥穴

第2節 遺物

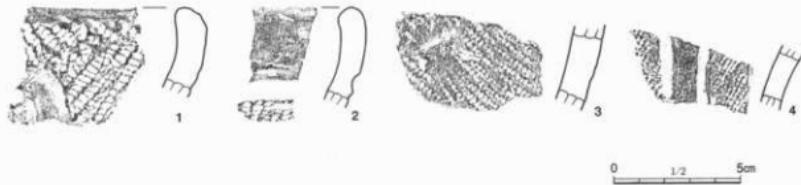
調査地からは少量の縄文早・中期の土器や土師器が出土したが、いずれも微細な破片であり、図示し得たものは、縄文時代中期の4点だけである。

1はキャリバー状の口縁部片で胎土に白色粒子を含む。色調は外面が黒褐色、内面が茶褐色で下部の色はやや黒ずんでいる。器厚は約1cmである。文様はRLの斜縄文を地文とし、沈線区画による磨消懸垂文が施されている。なお、地文である斜縄文は、口唇下1cm幅のところが横回転に、その下部が縱回転に施されており、羽状になっている。施文の順序は、縱回転の斜縄文、横回転の斜縄文、磨消懸垂文の順に行われている。これは加曾利EⅢ式土器に該当する。(7図-1)

2は2号階穴覆土中から出土した。キャリバー状の口縁部片である。口縁部の文様は、口唇下3cmのところに1条の沈線文を周回させ、口縁部文様が無文帯を構成している。胴部文様はRLの斜縄文が施されている。色調は外面がにぶい黄橙色で、口唇部が黒ずんでいる。内面は黒褐色である。器厚は約0.8cmである。これは加曾利EⅢ式土器に該当する。(7図-2)

3は胴部片である。文様はLRの斜縄文で縱回転による施文である。表面に凹凸があるため、施文が粗である。色調は内外面ともに黄橙色で、器厚は約1cmである。これは加曾利E式土器に該当する。(7図-3)

4は頸部片である。RLの斜縄文を地文とし、沈線区画による磨消懸垂文が施されている。磨消懸垂文と磨消懸垂文の間隔が狭い。色調は外面が黒褐色、内面が暗褐色である。器厚は約0.7cmである。これは加曾利EⅢ式土器に該当する。(7図-4)



第7図 縄文土器拓影図

第3章 まとめ

千駄堀寒風遺跡が研究史に最初に登場するのは、昭和8年の雑誌『ドルメン』誌上である。土地所有者による家屋の基礎工事中に、人骨3体と土器が出土したもので、平野元三郎・瀧口宏両氏によって報告されている。このとき出土した曾利式の埋甕は「世界考古学大系」にも掲載されており、よく知られている^{[14][15]}。このときの調査地点は特定できていないが、報告から類推して、県立松戸高等学校よりも南東に所在したと考えられる。以後、数次の発掘調査が行われているのは第1章に記したとおりである。過去の調査地点は、推定地点も含めていずれも県立松戸高等学校より南東に位置しており、調査成果からみて当遺跡の中心をなすのは県立松戸高等学校の南東方向、寒風台遺跡と谷を挟んだ対岸にあたる台地上と推定される。

千駄堀寒風遺跡のうち、県立松戸高等学校敷地内の調査は今回で2回目である。

昭和39・40年の第1回目の調査では耕作土から縄文時代中期の土器片が出土し、調査地に隣接した区域で縄文時代中期の土器を伴うピットを検出した。今回の調査では、おもに縄文時代中期の土器が出土したにもかかわらず、遺構は縄文時代早期の炉穴と陥穴が検出された。今回の調査地は遺跡の縁辺部にあたると考えられるが、今般早期の遺構が検出され、当遺跡の周辺部の様相の一端が明らかになったと考えられる。当遺跡の中心となる時期は縄文時代中期と考えられているが、早期から人々の活動があったことが改めて確認できたのは今次の調査の成果であるといえよう。

註1 坂詰秀一・関俊彦 1963「中和倉寒風遺跡」「松戸市文化財調査報告 第1集」 松戸市教育委員会

2 木下正史 1963「上本郷長者屋敷遺跡」「松戸市文化財調査報告 第1集」 松戸市教育委員会

* 本遺跡は「松戸市史」「千葉県埋蔵文化財分布地図」には上本郷七戸御遺跡と記載されている。

3 柳原松司ほか 1983「寒風台」「松戸市寒風台遺跡発掘調査団

4 山内清男 1928「下総上本郷貝塚」「人類学雑誌」43卷10号 東京人類学会

5 伊東信夫 1929「下総上本郷貝塚の竪穴に就いて」「史前学雑誌」第1卷第1号 史前学会

6 平野元三郎・瀧口宏 1933「下総高木村寒風発見の人骨」「ドルメン」第2卷第7号

7 岩崎卓也ほか 1961「松戸市史 上巻」 松戸市役所

8 西野 元 1963「松戸市千駄堀寒風遺跡」「和洋女子大学史学研究室

9 西野 元 1963「松戸市千駄堀寒風遺跡」「史潮」第83・85合併号 大塚史学会

10 平野元三郎・中村恵次・市毛鶴 1965「千葉県松戸市千駄堀遺跡」「千葉県遺跡調査報告書」千葉県教育委員会

11 中村定治 「寒風遺跡調査報告書」千葉県立松戸高等学校社会クラブ(発行年不明)

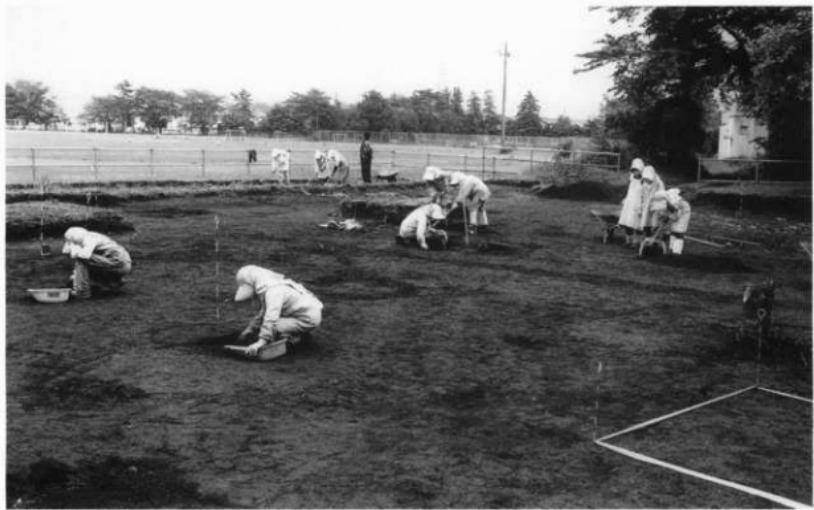
12 関山純也 2003「千駄堀寒風遺跡」「平成13年度松戸市内遺跡発掘調査報告書」 松戸市教育委員会

13 須賀博子・関山純也 2003「千葉県松戸市千駄堀寒風遺跡 第1地点発掘調査報告書」 松戸市遺跡調査会

14 上守秀明 1994「東関東中期拠点集落における異系統土器の在り方について(1)」「史館」第25号 史館同人

15 八幡一郎編 1959「世界考古学大系」第1巻 日本I 先縄文・縄文時代 平凡社

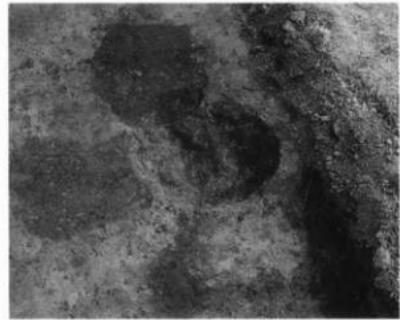
* 説明には千葉柏市寒風、籠形壺、勝板式土器と記載されている



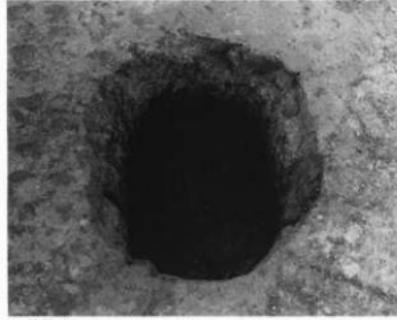
調査風景



土層



1号炉穴



2号炉穴



3号炉穴

報告書抄録

ふりがな	せんだぼりさむかぜいせき							
書名	千駄堀寒風遺跡							
副書名	千葉県立松戸高等学校格技場新築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	財団法人千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第461集							
編著者名	立石圭一							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地2 TEL 043(422)8811							
発行年月日	西暦2003年12月1日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
千駄堀寒風遺跡	千葉県松戸市中和倉590-1	207	018	35度 47分 53秒	139度 55分 45秒	20030501～ 20030516	490	格技場新築工事に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
千駄堀寒風遺跡	包蔵地	縄文	炉穴 竈穴	1基 2基	縄文土器(中期)			

千葉県文化財センター調査報告第461集

千 駄 堀 寒 風 遺 跡

—千葉県立松戸高等学校格技場新築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—

平成15年12月1日発行

編集 財団法人 千葉県文化財センター

発行 千葉県教育委員会
千葉市中央区市場町1-1

財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印刷 株式会社 正文社
千葉市中央区都町1-10-6